せたかむい No. 95

せたかむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第九十五号（毎月一日発行）
成九年八月一日

年表で読む古平の歴史《2》

■松前藩では藩士に《場所》を貸し与える

松前藩が、本州に数多くあるほかの藩と大きく違っていたのは、藩士に対しての知行（ちぎょう＝武士の社会での給料）が年貢米ではなく、知行所として土地を貸し与え、そこでアイヌの人たちと交易＝物品交換ができる権利を与えたことでした。これは当時の蝦夷地では、まだ米が作られていなかったからです。

宝歴十一年（一七六一）といいますと、港町に厳島神社が建てられてから十年ほどのちのことになりますが、この年の記録によりますと松前藩士は二百人余りとあります。その内、このような権利を与えられたのは五十九人で、これらの人は場所持（ばしょもち）といわれ上級の家臣でしたが、ほかは本州から運んで来た米を支給されていて切米取（きりまいとり）といわれていました。

藩主やその一族、重臣たちは、松前の周辺で和人が住んでいる所を直領（藩主が直接所有した領地）や知行地としましたが、そのほかの家臣たちの知行地は西蝦夷地で、アイヌの人たちが住んでいた集落を基にして区分されました。

このような場所制度ができたのは、松前藩が独立した慶長のはじめころ（一六〇六）といわれていますが、その区分されたひとつに古平場所がありました。最初の知行主は誰であったのかは分かっていませんが、新井田喜内だともいわれています。

では、家臣たちに与えられた権利というのはどのようなものだったのでしょうか。

蝦夷地では、はじめは松前地に住めるのは和人だけ、そのほかの土地はアイヌの人たちだけと、それぞれの住む場所をきびしく分けていました。その上、松前藩の許可が無いと蝦夷地に渡ることもできませんでしたから、この制度を利用して、まず知行主は、決められた大きさの船にアイヌの人たちの欲しがるような品物、酒・米・こうじ・たばこ・衣類や布地・ぬい糸や針・みそ・醤油・酢・鉄器・漆器などを商人から買い入れて知行所に運び、土地の産物と交換をし、本州の商人に売ることで利益を得ていたのです。

荷物を積んだ船は、その地域でのアイヌの代表者と物品交換をしたでしょうから、近くの船泊りにはいい場所が選ばれ、このような所は商場（あきないば）とよばれました。後には運上屋となった所もありましたが、古平では今でもその名前が残っているように、チョペタン川の河口にある本陣の辺りはこうしてひらけた所なのです。

―百年の歴史を閉じる―

稲倉石鉱山〈16〉

■経営悪化で赤字

好況を続けてきた稲倉石鉱山であったが、鉱山にとっては避けることのできない鉱脈の先細りと、外からの悪条件などが重なり、次第に経営が苦しい状態に追い込まれてきた。

埋蔵量については、東大・今井教授や道学芸大・宮沢教授らの調査によって、まだまだ開発の余地があり、採掘量については心配することはない、ということであったが、鉱脈の幅や品位、採掘条件を考えると経営的に困難なものがあった。

■今後の見通し

鉱山の経営を継続するためには、埋蔵量が一か月の採掘量の二年分が無ければならない、と常識的にいわれているが、探鉱に要する費用が大きかった。百メートルボーリングした場合一メートル当たり約二千円、さらに坑道を掘るには一・五メートル×一・八メートルの断面で、設備をふくめると約一万円を要した。（昭和四十年現在）

また、鉱石の品位も平均二十二パーセントと下がり、採掘現場も次第に深くなるにしたがって生産コストが上り、自由化によって海外から安価な鉱石が輸入されるのに加えて、国内の需要もまた落ち込んで来ていた。

昭和三十八年をピークとして経営は赤字をかかえるようになり、鉄興社では、稲倉石鉱業所の独立採算制が論議されていた。

■売山問題で

組合と交渉

鉄興社では、稲倉石鉱山の独立採算による経営分離を労働組合に示したが、組合側の反対でこれは撤回した。

しかし、赤字が累積していく現状から、昭和四十四年、ついに大江鉱山を経営している北進鉱業㈱に売山することになり、組合との交渉に入った。

交渉は何回も行われたが、組合側ははじめの売山反対から、全員の大江鉱山への移籍、賃金の保証、退職金の増額などを条件とする交渉へ移っていった。

会社側は、赤字の累積で、もはや閉山以外にはこれを打開するみちは無いと考えていたが、日本鉱業㈱との間で売山の話が出たことから、従業員の再就職の確保、ヤマの灯は消さない、原料の供給も引き受けるということで、売山に踏み切ったことを組合側に説明した。組合側が条件付きにしろ売山に同意してくれたことに感謝するとしながらも、容易には組合側の条件には応じられないことを回答した。

―生活の知恵―

季節を味わう

福井幸平

台風も来る季節――冷夏？といわれる中で、北海道も三十度を越す気温の日が続いて、やはり暑いこの頃です。

何かさっぱりしたものでも食べたいと思って、好きなすし鰊を焼いてお茶づけにしたらおいしかった。この頃はぜいたくになったのか、キウリに味噌をつけて食べるなんてことはなくなった。ときどきいも餅・いもだんごなど食べたいと思っても、なかなか口に入らない時代だ。

先日、知人がいも餅を作ったところ喜んで食べたのは年寄りだけで、若夫婦と子どもたちは全く口にしなかったという。さもあろう、さもあろう。

よく野菜を食べろ食べろというが、私は、すし鰊の三平汁にササゲをたっぷり入れてばくばく食べている。

三平汁を大いに食べて、夏バテを防ぎたいものである。

× × ×

すし鰊あればこと足る夏料理
夏昼餉茶づけサラサラすし鰊

遥かなる故郷の思い出

内地通いのヤミ船 ②

[35]

橘 美我 春

当時のヤミ船というのは、北海道の各地の漁港を廻ってはいろいろな海産物の干物を買い取り、それらを新潟港や酒田港あたりに陸揚げし、帰りには米俵を船倉いっぱいに積み込んで、小樽港まで運ぶのが主な仕事であった。ある時などは、びんに入った焼酎を大量に運んだこともある。

函館近くの漁港でするめを積み込んだ時であった。倉庫から船へ荷物を運んでいたら、なんとなくするめとは手ざわりが違う包みが一つあったので、その包みを開いて中を見たところ、驚いたことにゴム長ぐつであった。その頃ゴム長ぐつは、ヤミ値でなかったらとても手になんか入らない貴重品で、倉庫の中でたぶん間違えてまぎれ込んだのだろう。十二足ぐらい入っていたと思うが、親方に話して乗組員に一足ずつわけてもらうことにした。親方としては、ヤミ値が高いするめの方が良かったらしかったが、われわれの方は新品のゴム長ぐつが手に入って大喜びであった。

当時は、ほとんどの物資が政府によって統制されていて、積み荷は政府の出先機関の証明書が必要であったが、その証明書も無制限に出してもらえるわけではない。したがって証明書の三倍くらいの積み荷で出港するので、沿岸近くを航行することができない。そんなところを走っているとすぐ海上保安庁の巡視船につかまってしまうので、小樽港を出港すると、真向かいのソ連領・ウラジオストックのあたりをめざして一昼夜近く航行し、そこから百八十度反転して一直線に新潟港に向かうのである。これだと巡視船に合うことはまずない。そのかわり新潟港まで一日余分の三昼夜かかることになる。笠谷船長はなかなかあたまがいい。うまいことを考えたものである。

洗張（あらいはり）と張り板

竹内 コト

昔、私の家では毎年夏になると、母は“張り板”を出してきていたことを思い出します。

張り板というのは、丸洗いできない上等な着物や綿の入った着物類をほどいて、縫い合わせる前の布の状態にしたものに、のりをつけて張りつける板のことです。

当時は八人もの子どもがいましたし、特に女の子は和服を着ることが多かったので、洗い張りをするのにはそうとうに手間がかかったようでした。丹前やふとんの類から、反物などいろいろあります。

母は、夏になると洗い張り衣服を次々にといて、綿の入っているものは抜いて綿を打ち直し、仕立て直しをしては子どもたちに着せるのです。ほどいた布はよく洗濯をしてから、それにのりをつけて張り板に張り、よくしわを伸ばします。私は少しでも手伝いをしようと、母の側についていたことを覚えています。

母は、朝早く起きてまずお天気の様子を確かめるとフノリを煮て、それをさらしの袋に入れてこし、洗い張り用ののりを作ります。太陽が昇りはじめると張り板を出して来てよく拭きます。そして、のりに浸した布を張り板の上に広げて、布が曲がらないように、手に別な布を持ってそれで伸ばしながらきちんと張っていきます。なかなか難しいもので、手早くしないと乾いてしまいます。張り終ると、

←（次ページ 下段へ続く）

亡夫の霊に魅せられて

渡辺ハツエ

琴平神社の例祭もつつがなく執行できたことは、関係者はもちろんのことでしょうが、私ども町民にとっても大きな喜びでした。

かえりみますと、御神輿渡御行列「御渡入り」はずいぶんと勇壮果敢であったものと、昔のお祭りをしのび懐かしく思い出されます。

神輿かつぎの奉仕者は海の強者、血気盛んな漁師さんたちでした。板子一枚下は地獄の漁師人生、危険な漁業に従事する若者は身の安全と豊漁を祈って、神輿かつぎに闘志を燃やしたことと思われます。

七月九日の宵宮祭の海上渡御には、健在だった頃の私の亡夫も元気に随行していたものでした。ある年のことでした。海上渡御の行われている夕刻、海上からの厳かな笛や太鼓の音に誘われるように急いで浜辺へ行きました。神輿の渡御は沢江町から沖町方面に向かって走っていました。勇壮な海上渡御の中に、わが家の小さな健生丸も大型船に負けじと、波を乗り越えて走っているのが見えました。その時、護岸の上に立って見ていた近所の奥さんが、「めんこいネ」といってくれました。なるほど、大型船にまじって小型の「健生丸」は可愛いい存在でした。

神輿の海上渡御に随行する亡夫の勇姿は、この日が見納めとなってしまいました。

思い出すと、昔は神輿の町内の渡御には、学校の生徒さんたちの清掃奉仕がありました。当時は校外団というものが組織されていて、ほうきを持っていねいに道路を掃き清め、それが終わると山から白砂を運んで来て、それを二十センチくらいの幅で道路に線を引きます。お祭りが終わっても、白砂の線が名残として消えないで残っています。私が小学生の頃から、そして私の子どもたちの時代までも続いた、お祭りへのささやかな奉仕だったように思われます。

お祭りの渡御行列が終わるまでは、白砂を踏んではいけないと大人にいわれていましたが、いつの間にかこのようなしきたりもなくなって、今では、昔のお祭りの語り草になってしまったようです。

四柳

渡辺ハツエ

ミニ菜園明日の予定を組んで寝る

背の長けし孫の電話は他人めき

老いて尚猫追っ払うたくましさ

（前ページ下段より続く）

張り板を陽の当たるところへ出して立てかけておきますが、突然の雨や風のときは大変で、大急ぎで家の中に取り入ります。乾くとはがれやすくなり、のりがきいていて、ぴーんとして新品のように生まれ変わります。

昔の人は、知恵をしぼって再生を考えたんですね。母は、お盆前に張り終らないと、陽が弱くなって仕事に時間がかかるといって、一生懸命にやっていました。今は洗濯というと、すぐクリーニング屋さんに出してしまう便利な時代になりました。

気がついてみると、今は着物を着ることも少なくなって、張り板など知っている人も少なくなりました。主婦も働きに出ることが多くなりましたから、家事にはあまり手をかけないことになるんでしょうね。

すっきりしないお天気が続いていますが、夏本番です。この季節になると思い出すことを書いてみました。

バレー大会で勝っちゃったヤマ男〔Ⅱ〕

稲倉石の思い出

富山市　高橋藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

昭和四十一年に「第一回古平町職場対抗バレーボール大会」が開かれ、熱戦をくりひろげたのをご存知でしょうか。

六月二十日より二十二日までの三日間、当時、小学校の体育施設としては全道一と聞いていた古平小学校の体育館で開かれたのです。

その頃、稲倉石鉱山では、バックラインの後ろには事務所のガラス窓があり、サイドラインのすぐ脇には川が流れ、ガラスを割ったり川に落ちながらの狭いコートで、ネットタッチ多少あり・ホールディグはお互いさま・ネットオーバー自由・得点のゴマカシおおいにあり、という球ジャレバレーを楽しんでいたのですが、公式試合で我が腕を試してみようという、身の毛もよだつ程のたくらみをたてたのです。

酒の早呑み大会ならいざ知らず、心臓と反則にかけては粒ぞろいの豪の者ばかりである山奥の荒くれ男には、ルールを守り審判に従うという事は苦手中の苦手だったんです。

メンバーは、採鉱のKキャプテン以下十名というギリギリの人員で、公式戦に出場する記念にとつくった上衣だけのユニホームも、いかつい体には似合う筈はなく「山男丸出し」の田舎っぺそのものでした。

「負けたら浜町で一杯」を楽しみに試合に臨んだのですが、技術・試合運びではるかに劣るものの、強心臓とカッコ悪さで勝る我がチームは、お茶がわりに飲んだ特製のミネラル（実は蝮酒）が効いたのか、アレヨ・アレヨの連続で勝ち進んでしまったんです。

決勝の相手は強豪の中学校教員チームでした。試合前に相手チームの真似をして円陣を組んだ選手は、監督のきめ細かい作戦を期待していたのですが

「球を床に落とすな」

「返って来た球は相手のコートに返せ」

「ポイントを取られたら相手をニラミつけろ」

が指示だったんです。

一セットは、前半大きくリードしたものの徐々に追いつめられ、逆に一六対二〇のピンチ。ここで作戦タイムをとり全員大きく深呼吸。ただそれだけ。ちょっとミネラルを飲む。またたく間に挽回し二二対二〇勝つ。

二セット目は、プレー開始から劣勢にたたされたが、サイドからのアタックが豪快に決まり出し、その差をジワリジワリと縮めたが、またも一七対二〇の大ピンチ。しかし回転レシーブで球にくらいつき、一進一退の末に二四対二二で優勝をものにした。

おおかたの予想では「稲倉石は問題外」との事だったらしいのですが、あッという間に優勝し「顔を真っ赤にして頑張ったヤマ男は大したもの」と評判になったとか。（顔が赤かったのは蝮酒のせいだったんです）

賞状とトロフィを手にした時は、全員、のどはカラカラ・息はミネラルの匂いでプンプン・体はグッタリでした。

あれからもう三十年も経ったのですが、まるでマンガでも見ているような、ほろにがーい思い出となりました。

・準々決勝（対信用金庫）
二対〇
（二一対一三・二一対五）

・準決勝（対商店会）
二対〇
（二一対五・二一対七）

・決勝（対中学校教員）
二対〇
（二二対二〇・二四対二二）

禅源寺墓地移転願い

―古い文書を読む―

◇明治四十二年現在の本堂・庫裡が落成

建築から約九十年がたって、今年、禅源寺の本堂の一部と種田家位牌堂などの改修工事が行われましたが、町内ではこのような古い時代の木造建築物は少なくなりました。

本州には歴史のある木造の古い建物がたくさん残っているのですから、これからもこのような建物は大切にしていきたいものです。

◇古い文書に見る禅源寺の移転

禅源寺は、創建当時新地町六番地となっていますが、場所は現在の吉田商店と藤沢商店の裏の山際に建っていたと思われます。しかし、後に新地分教場が建ったりしたこともあって、どうもその場所が今のところはっきりしません。

やがて新地町方面の人家も増えてきたことから、明治十五年五月、檀家総代人と住職が連名で、浜町への移転願いを開拓使に出しました。それを北大図書館に残っている文書から見てみましょう。（本文は現代文に）

墓地移転ニ付キ地所御割渡願

古平郡新地町六番地

法興山禅源寺

私ドモノ寺ハ新地町ニアリマスガ、コノトコロ人家ガ増エテキテ市街ト接スルヨウニナリ、何カト妨ゲニモナロウカト思ワレマスノデ、市街ト関係ノナイ地所ニ移転イタシタイト考エテオリマス。ツキマシテハ、コレマデノ地所ハオ返シシ、別ニ浜町奥ノ別紙図面ニアル地所ヲオ下ゲ渡シ下サイマスヨウ、檀家総代トモ協議イタシマシタノデ、何トゾオ許シノ程ヲ懇願申シ上ゲマス。

檀家総代人　若狭浅吉㊞
代堤不二彦㊞
戸沢栄太郎㊞
宮崎源八㊞
斉藤清四郎㊞
和田勘兵衛㊞
鎌田長蔵㊞
蟇目八三㊞
右住職　中山大安㊞

開拓使残務取扱
調所広丈殿

コノ書類ハ、事実ニツイテ調ベマシタガ不都合ハアリマセンノデ奥印ヲイタシマス。

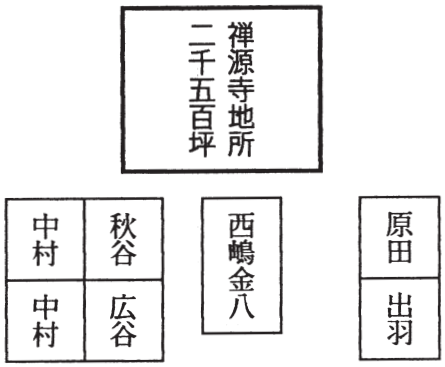
古平郡各町村戸長
西嶋金八

（朱書）願之趣聞届候事
明治十五年六月七日
札幌県令調所広丈代理
札幌県大書記官佐藤秀顕

× × ×

移転した場所は現在の本堂から下がった辺りで、倉庫に使われている建物が、その造りから当時の本堂ではないかと言われています。古い文書からはいろいろなことが分かってきます。

禅源寺移転先の図面略図



墓地移転ニ付地所御割渡願
古平郡新地町六番地
法興山禅源寺
該寺新地町於テ設置罷在候處近年ニ至リ人家稠密ニ及市街ノ自然妨ケニモ相成候間一層市街関係無之地所ニ移轉仕度就テハ是迄ノ地所ハ返上仕更ニ浜町奥ニ於テ別紙図面箇所御割渡被成下度若檀家総代ト協議候付

古平ホトトギス会

草萌える八十路の命はげまされ　斉藤波留
海原の礁に白き卯浪かな　越野清治
お点前の夏座にひびく筧かな　仲谷比呂子
函館の夜景と別に烏賊灯燃え　仲谷美砂
留守の娘に買うイヤリングリラの旅　大島喜恵
亡き兄の姿が浮ぶ籐寝椅子　福井幸平
つつましく暮らし余生の水中花　越野敏雄
堤防の夏草刈の機の音　越野スミ子
出港の船足遅々と冴え返る　大和田絵伊
閑古鳥火を噴く山のただずまい　水見句丈
真っ白き夏足袋に替え舞稽古　木村芳園
老ホームおやつに冷えし夏みかん　山口浪
所作今にのこる火渡りまつりかな　長谷川和子
積丹の貫通道路混む夏に　福井久美子
灯のともるキャンプ連なる浜辺かな　仲谷安女
杖ついて試歩そこらまで閑古鳥　岩瀬みのる

★昨年の古平町文化祭で古い懐かしい時代の写真を展示し、その解説集も出したところ大変よろこばれました。今年はこのほか、古平町広報で紹介している《文化財》についても展示をする計画です。この機会に、ご家庭にある古い写真などお借りして複写し、展示することも考えておりますので、ご協力のほどをお願いいたします。

ご家庭にある古い文書や写真をお貸し下さい

★また家の整理をしていて、古い文書類などが出てくることがあろうかと思いますが、今ではこれらは昔のことを知るための私たちの貴重な財産です。紙切れ一枚でも大事にして、それらのものがありましたら一度見せて下さい。禅源寺の古い文書でもお分かりのように、当時のことを正確に知る大事な手がかりになるのです。あわせてお願いをいたします。

古平の方言（6）

・けねが＝くれないか、くれ
「おれサ これ けねが」
・けらがかり＝網いっぱいに魚がかかる
「おらどごの船 きょう けらがかりだ」
・ける＝くれてやる ・けれ＝ください
・げれっぱ、げっぱ＝いちばんあと、びり
「いつ走っても げれっぱだな」
・けつまずく＝つまずく
「石に けっつまずいてけがした」
・けつまめ、けっつまめ＝そらまめ
・けんけん＝片足飛び、片足で石をけるゲーム
・けずがれ＝行ってしまえ、出て行け
「おめェみたいなヤツどごさでもけずがれ」
・こ＝かわいいものや、身近なものの下につける愛称 「犬っこ、舟っこ、本こなど」
・こが＝水槽、大きな樽（物をうるかす）
・こぎおろす＝ひどくくさす
・こけ、こげ＝（うそ）つくな、（ホラ）ふくな
・ごくつぶし＝仕事をしたがらない、家でごろごろしているような人
「あいつは いいごくつぶしだ」
・こぐる＝（強く）こする
・こさえる＝こしらえる、（物を）作る
・ごしゃまんと＝たくさん、いっぱい
・こじける＝駄々をこねる、ものごとが思い通りにいかない、どうにもならない
「この機械 すっかりこじけでしまった」
・ごしょいも＝じゃがいも
・こそっと＝こっそりと、そっと
・ごだぐ＝くどくどとへりくつや、文句をいう
「ごだぐ ばっかりならべて・・・」
・ごつい＝頑丈、手ごわい、スマートでない
「ごっつい奴だなぁ」「ごつい車だなぁ」
・ごっこ＝どもり
・こったら＝（見下げて）こんな
・こったらべっこ＝こんな僅か、ごく少ない
・こっぱずがしい＝恥ずかしい、てれくさい
「こったらごとしたら こっぱずがしい！」
・こっぱやぐ＝こんなに早く、素早い
「こっぱやぐ なんしに来た」
・ごっぺかえす＝失敗する、恥をかく
「やぁやぁこの間 ごっぺかえした――」
・こっぺくさい＝生意気な、おませな、（おれの）相手になんかならねぇ
・こてんぱぁ＝さんざんに、めちゃくちゃ
「あいつばこてんぱぁにやっつけでやった」
・こなす＝やりとげる、（仕事を）よくやる
「仕事みんな こなしてしまったな」
・ごねる＝無理をいう、へりくつをいう
「あいつよーぐ ごねるやづだ」

あとがき

☆先日、札幌にお住まいの吉川義雄さんから、「【せたかむい】もまもなく百号ですね。今まで、古平で百号をこえた出版物はないのですから、これからもがんばって下さい。」というありがたい激励のお便りをいただきました。

来年の一月号がちょうど百号になります。「来年のことをいうと鬼が笑う」といいますが、月日は早いものですから企画は考えています。まず多くの方から記録にも残らない、年月とともに忘れられていってしまうような話を集めたいと思っています。皆さんからのご協力をぜひお願いいたします。

【せたかむい】の置いてあるのは・役場 ・文化会館 ・浜町郵便局 ・福祉センター ・古平郵便局 ・古平温泉のほか、何軒かの分をまとめて預かってくださる商店や個人のお宅もあります。ご愛読をいただけるようさらに努力します。